令和４年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
（地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業）
成果報告書

団体名		特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
施設名		宮古市民文化会館
助成対象活動名		普及啓発事業
内定額(総額)		7,156 （千円）
	公演事業	0 （千円）
	人材養成事業	0 （千円）
	普及啓発事業	7,156 （千円）

（３）令和４年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程 主な実施会場	概　要 （演目、主な出演者、スタッフ等）	入場者・参加者数	
1	SUNRISE THEATER project ※	11 月 14 日～23 日 12 月 16 日	【DRAMA】 脚本：穴迫信一、振付：北尾亘、出演：伊東沙保 【MUSIC】 演奏：BLACK BOTTOM BRASS BAND	目標値	800 人
		宮古市民文化会館 大ホール		実績値	入場者：226 名 参加者：24 名
2	コミュニティシアター事業　第３回みやこ市民劇「さらば義経」	4 月～5 月	脚本：道又力 音楽監督：寺崎巖 演出：坂田裕一、志賀政信 など	目標値	入場者：1,000 名　参加者：100 名
		宮古市民文化会館 大ホール		実績値	入場者：901 名 参加者：120 名
3	三陸 AIR～本州最東端のアーティスト・イン・レジデンス～	9 月～3 月	レジデンスアーティスト ・鈴木ユキオ ・髙井賢太郎、棚原健太、町田倫人	目標値	300 名（地域交流参加者）
		宮古市民文化会館		実績値	入場者 211 名 参加者 349 名
4	芸能 Re；Connect	2 月 5 日	出演：黒森神楽、鮫神楽 摂待七ツ物、牛伏念仏剣舞	目標値	入場者 525 名 参加者 100 名
		宮古市民文化会館 大ホール		実績値	入場者：360 名
5	劇場に行こう！※	6 月～12 月	・ラストラーダカンパニー「サーカスの灯」 ・澤江衣里「こえのひびき」 ・BLACK BOTTOM BRASS BAND「特別コンサート」 ・柳家喬之助ほか「学校寄席～東西聞き比べ～」	目標値	4,270 名
		宮古市民文化会館 大ホール		実績値	3687 名
6	コンサートキャラバン 2022　―海と紡ぐ音楽会―	7 月 27 日～29 日	ソリスト：山中美樹子 演奏：いわてフィルハーモニーオーケストラ	目標値	入場者：200 名 参加者：20 名
		市内 5 箇所		実績値	入場者数：121 名

7	みやこジュニアカンパニー事業	4月～3月	【こども劇団みやこデイジー】 演出：小笠原景子 【ジュニア・アンサンブルみやこ】 講師：寺崎巖	目標値	入場者：300名 参加者：40名
		宮古市民文化会館		実績値	入場者：183名 参加者：50名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

普及１・７…実施日程を変更した

２．自己評価

（１）妥当性

自己評価
社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。 宮古市民文化会館は、岩手県中部沿岸（宮古・下閉伊地域）の芸術文化振興の中核文化施設として、宮古市しや民文化会館施設条例に加え、宮古市総合計画、並びに震災の文化復興に関する提言書を踏まえた８つの社会的ミッションを設定し運営している。 令和４年度はそれらを踏まえ、４つのミッションをリンクさせた事業を計画し、概ね予定通り実施した。 （１）地域の芸術文化創造と発信を行う場としての役割を担う作品創造・発信事業 ▶（普及啓発事業１）SUNRISE THEATER project （２）新たなコミュニティの形成と牽引する芸術文化中核団体へのサポート事業 ▶（普及啓発事業２）コミュニティーシアター事業 第３回みやこ市民劇「さらば義経」、 （普及啓発事業４）芸能 Re:Connect、（普及啓発事業６）コンサートキャラバン （３）各地で活躍する表現者を地域に滞在させながら創作活動を行い、地域との交流を通して地域文化を豊かにする役割を行うレジデンス事業 ▶（普及啓発事業３）三陸 AIR （４）文化芸術による次世代育成を推進するため本市の小学校、中学校、高等学校に通う児童生徒が劇場で鑑賞し、体験する事業 ▶（普及啓発事業５）劇場に行こう！、（普及啓発事業７）みやこジュニアカンパニー事業
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。 ●文化的意義 本市及び近隣市町村は、良質な芸術文化に触れる機会が極端に少なく、物理的にも心理的にも芸術文化への距離が遠い地域である。今年度初めての試みとしてアーティスト・イン・レジデンスを公募で行い、国内外で活躍する鈴木ユキオ氏と、普段触れる機会のない琉球伝統芸能活動家の髙井賢太郎を招聘した。地域交流プログラムとして公募ワークショップや小学校へのアウトリーチを行なっていただき、普段触れない芸術に触れる貴重な機会となった。 ●社会的意義 コロナ禍においてここ数年は映像メディアが発達し、劇場での観劇者数がより激減していた。令和４年度は本館で創作された演劇作品を市内外に広く発信し、劇場に人を取り戻す工夫を行なった。また創造事業の実施によりスタッフのスキルアップになったほか、一定期間滞在をする中で多種多様な地域文化の交流が行われたことは文化拠点としての大きな意義があると言える。 ●経済的意義 各事業アンケートから来場者の約２割が市外から訪れていたが、普及啓発事業１ではおよそ半分が市外からの来場者であった。またアンケートより来場者の約３割が公演前後に市内で飲食や買い物を行っていることが分かった。このことから公演事業の実施においては観光・経済等への波及効果があったと言える。 以上のことから助成に値する意義が継続して認められると考える。

（２）有効性

自己評価
目標を達成したか。

今年度事業では東日本大震災からの文化的復興を軸とした３つの目的に沿い目標を立てた。
また、その達成に向けた目標については以下の通りである。

１．本館で活動する市民の満足度を 70%まで向上させ、コミュニティ形成等を促進させる。
→普及啓発事業２の参加者アンケートを参照。70%を超える結果を得たため達成とした。

２．集落地等僻地や福祉施設等で舞台芸術に触れる市民数を R3 年度より５%増加させ、鑑賞の土壌を作る。
→普及啓発事業６において、福祉施設も視野に入れていたが、コロナ禍での接触不安により断念した。例年通り市内５箇所にて演奏を行なったが、参加者数は前年度の 0.8%と伸び悩み未達となった。

３．AIR 事業等でのアーティストの滞在延人日数を R3 年度 50%増加させ、地域との多様な交流を促進する。
→今年度は滞在アーティストに１週間以上の滞在を条件に地域交流プログラムやリサーチ、公演を行なった。レジデンスアーティスト数も増加したことから目標を達成した。

４．宮古市「発」の作品製作により市民の舞台芸術への関心を 72%向上させる。
→普及啓発事業１におけるアンケートをもとに集計し達成した。

５．郷土芸能等の鑑賞者数及び参加者数の延人数を R3 年度より 20%増加させ、来場者の回復を図る。
→参加者数として出演者数をカウントした。前年度から大きな変化はなかったが、来場者が今年急増し達成となった。

６．地域の文化拠点として宮古市民文化会館の取り組みに関心を持つ市民を R3 年度より 5%増加させる。
→本助成公演の中で実施したアンケートをもとに算出し、前年度より 16%増加し達成となった。

７．本館を訪れ文化芸術を鑑賞する市内の児童生徒の割合を 100%までに回復させる。
→１公演のみ新型コロナウイルス感染症の影響を受け 6 月実施を 12 月実施に変更した。その際授業スケジュールの調整がつかなかったこと、また市内での感染者数増により欠席した学校があり 100%には至らなかった。

８．年間を通じて文化芸術活動に参加する児童生徒数を 10%増加させるほか、活動回数を 25%アップさせる。
→参加率については徐々に回復傾向にあるが結果 7%で未達であったが、活動数は前年度比 29%の増加で達成した。

（３）効率性

自己評価
アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。 ７事業のうち２事業を計画変更で実施、他は当初の予定通り実施ができた。 コロナ禍における、実施の中止、計画変更における市民の理解も広がり計画変更においても大きな混乱なく実施することができた。 事業費の効率性と連動するが、本市は東京駅を起点とした往復移動時間に８時間以上を要し、また本施設がカバーする圏域（宮古・下閉伊地区）は神奈川県の面積に匹敵する。ワークショプ１つを実施するだけでも最低２日を要するため、滞在するアーティストには複数の事業を実施するスタイルと取っている。特に令和４年度は初めて公募でアーティスト・イン・レジデンスを行い、限りのある滞在の中でアウトリーチやリサーチ、公演を実施するなど、アーティストにとっても濃密な滞在であり、また市民にとっても新たな芸術文化との交流を行うことができる期間となった。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。 支出については概ね予定通りの執行となったが、収入は大幅に下回った。 新型コロナウイルス感染症対策も緩和化された１年であったが全体的に客足の回復はできなかった。 これは、事業番号１の演劇公演では、公演客席をホールに常設されている席ではなく、舞台上に組む特別仕様にしたことで当初の見込みよりも大きく下回ったことが要因であるが、数年かけて作られている本館発の創作作品の経過発表を前年度３月に行なったため、見込みも試験的にならざるを得なかった。 また、前年度中止となった事業番号２市民参加型公演の文芸費や募集にかかる広報宣伝費が今年度の経費から外れていたため当初よりも支出が少なくなったが、予算 90%台に収めることができ、当初の計画通りに進んだと言える。

（４）創造性

自己評価
地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

本館は岩手県沿岸地域の文化施設として最も古い施設の一つである。施設を利用する文化団体・利用者も高齢化が進み、幅広い世代の市民の文化芸術や付随する価値等を享受する機会が乏しい状態にある。

上記の背景の中、地域の文化拠点としての機能を最大限発揮するため、各事業の実施において３つの主軸を置いている。

① 創造的な市民の集いの場づくり（事業番号２・７）

みやこ市民劇を継続的に実施するための中枢を担う「みやこ市民劇ファクトリー」と、小学生～高校生を対象に実演芸術を体験・発表する「こども劇団みやこデイジー」、「ジュニア・アンサンブルみやこ」が本館を拠点に置き、それぞれの活動のサポートを行なっている。小学校区のコミュニティーが強い本市において、各地域から集う施設として本館が機能しており、それぞれの活動の発表・公演には本館も協働で行なっている。

令和３年度から今年度に延期となったみやこ市民劇においては、企画段階から市民と関わりを持って作り上げられる舞台となっており、その機能を存分に発揮している。

② 本館から新しい事業を創作・発信していく試み（事業番号１）

今年度、宮古市ならではの作品作りを行うことを目標に「SUNRISE THEATER project」（事業番号１）を実施した。演劇作品では令和３年度に滞在製作した作品をブラッシュアップし上演した。自然や災害など、本市の結びつきが強い作品であったことから観客からも好評であり、本館初のレパートリー作品になったと言える。また音楽コンサートでは市内の吹奏楽団体有志に協力いただき、プロのアーティストとの共演を行った。コロナ前に盛んに行っていたプログラムであるが、参加者が予想外に増え、コロナ禍からの復活を垣間見た事業となった。

③ 実演芸術家との交流体験（事業番号３）

今年度からアーティスト・イン・レジデンスを一般公募にて初めて行った。

コロナ禍で自粛してしまった実演芸術家と地域住民との交流を、レジデンス事業を起爆剤として市民に浸透させること、また普段見ることのない芸術文化を間近で体験、鑑賞できる機会として実施した。

アーティストには２週間滞在していただき、市内をリサーチしながらワークショップ等の交流プログラムを行った。本助成で２組のアーティストに滞在いただいたが、地域交流プログラムや公演を鑑賞した市民から大変満足度の高い評価を得たことから、意義のある事業となったと言える。

自己評価
地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

以下の事業から、地域の文化振興及び文化芸術の発展に繋がったと考えられる。

① 市内全ての小学生、中学生、高校生が本館で鑑賞する機会（事業番号５）

前述の通り本市は都市部に比べ芸術文化へ触れる機会が極端に少ない地域であることから、小学生から高校生までの児童生徒が年に１度本館大ホールで鑑賞の機会を設けることを、指定管理の条件として加えられている。演目選びには諸学校の鑑賞教室担当の先生に出席していただき、演目の要望を伺うところから協力いただいている。令和４年度は一部学校を除き全学年で鑑賞の機会を設けることができた。鑑賞後のアンケートでは秋の学習発表会や文化祭での参考になったという声も多く聞かれた。

② 多様多種の郷土芸能の発信（事業番号４）

With コロナを迎え、徐々に市内各行事の再開が相次いだ。郷土芸能についても地域の「まつり」が復活してきたことからその活動も活発化した傾向にある。今年度においても郷土芸能の発信を目的に開催した「みやこ郷土芸能祭」では、市内の郷土芸能団体に加え、同じく沿岸で活発な活動をしている青森の鮫神楽を招聘し実施した。当地方は神楽が盛んであるが、他地域の演目を見る機会自体が少ないため、貴重な経験となった。また団体同士の交流も生まれるきっかけにもなり、双方の今後の活動の刺激となる機会となった。

（５）持続性

自己評価
事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

事業を投じて本組織がより劇場・音楽堂としての機能が強化され、組織活動が継続的に発展したと考える。
以下 PDCA サイクルの視点から考察する。

●PLAN
本館が抱えるミッション、８つのうち、事業運営にかかる事業として下記の４つがある。この４つのミッションを起点に各事業が展開されている。
①市民協働運営の原則　②芸術鑑賞機会の増進と市民参加型　③子どもたちの芸術体験とアウトリーチ活動の推進　④心の復興事業とコミュニティづくりの推進

●DO
市民参加型企画にはその運営を市民にかかわってもらう体制を整えている（事業番号２、７）。また付随して文化芸術に関わる人材育成として企画の立ち上げから実施に至るまでのサポートもしている。市民に教える機会を設けることで会館職員のレベルアップも図るほか、舞台技術職員はテクニカルプランナーとして関わり、舞台専門家の育成に努めながら事業を実施している。

●CHECK
全ての事業においてアンケートを実施し、公演の満足度のほか、舞台芸術や本館の取り組みへの関心度、施設内の過ごしやすさを計測している。事業の実施後、月１回の企画経営会議にて事業のアウトプットについて報告を行い、内部での検証を行っているほか、年２回の運営協議会にて事業を報告し評価を行っている。

●ACTION
企画経営会議、運営協議会で受けた評価は早ければ次回公演に、遅くとも次年度には改善するよう努めている。
本年度はコロナ禍から緩和化され事業実施がしやすくなったが、それと同時にどのように来場者数を回復させていくかが課題となった。本館は震災からの復活として様々な事業を実施し、来場者の回復を傾向にあったが、近年のコロナ禍で再び客足が遠のいた状態にある。次年度以降、様々な工夫と事業実施にあたっての必要事項を見直していく必要がある。

本組織は岩手県沿岸地域の文化芸術コーディネーターであることから、本館を拠点に沿岸地域における文化芸術事業の相談窓口を担っている。事業で得た経験を地域に還元することが可能となり、持続的な視点からも活動が発展しているものと考える。